
無題 no title

ハルコ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無題 no title

【NZコード】

N4301D

【作者名】

ハルコ

【あらすじ】

ほのぼのテイストで送る、ボンヤリ少年とキッパリ少女のお話。オムニバス形式。HPの長編のおまけとして書かれました。

「運命つて、変えられないことを言つんだって」

「……は？」

「で、変えられないのが、宿命」

「……ふ……ん」

他にどう言えれば良かつたのか。とにかく佐久間 侑子はそれしか言えなかつた。

放課後の教室。鮮やかな朱色に染まる机、黒板、そして何やら突然呟き出した少年。

少年・語木 隆祐は侑子の二つ前の、左斜めの席に座つて居る。ちよつと窓際の席で、ぼんやりと空を眺める。

今まで一度も話した事のなかつた少年が、なぜ自分に話しかけてきたのか。侑子には解らない。

確かに今、教室には私しか話し相手が居ないけど！ てかなぜウンマーとかシユクマーとか！？

その手の話が大嫌いだった侑子は、握っていたシャープペンシルの芯を折る。

勢い余つて、学級日誌の「今日のひとこと」欄に小さな穴を空け

た。

別に日直のペアでも無い隆祐 侑子の相方は逃走 は誰に話すという訳でもなく呟き続ける。

「テレビで言つてたんだ。でもドリマや漫画では運命って変えようが無いって良く言つよね……」

「……」

返事をして良いものか解らない。どう言えば良いかも解らない。

隆祐はクラスでも目立たないタイプの少年だ。仲間外れにされている訳でも、ましてやイジメられている訳でも無く、いつもボンヤリ一人で過ごしている。

無造作に伸ばされた黒髪はクセがあり、侑子の肩でピッシリと揃えられたモノとは正反対と言える。今はそれが夕日に朱く染まり、緩やかな風で動くとまるで別の生き物に見える。

てかナゼ帰らない語木隆祐！ あんたは帰宅部だろ！

侑子は覚えている。隆祐が春の体力測定の短距離で好成績を叩きだし、後日陸上部にスカウトされたことを。

スカウトされた隆祐はすぐに断った。

走る意味を見い出せない。

それが断つた理由。以来陸上部の者とは仲が良いと言つては無いが、本人は気にしてない。

とにかく少年は部活に所属していないハズなのに、なぜまだ学校に残っているのか解らない。不気味だった。

わざわざと書き上げて帰る。

侑子は「今日のひとこと」欄をテキトーな言葉で埋めていく。
が。

「佐久間さんは」

決定打。名前を呼ばれては返事をしなくてはならない。侑子の性格上、無視もできない。

「……なに?」

「佐久間さんは、運命とか宿命とか。どういって?」

「……はあ」

溜め息混じりに聞き返す。

「俺は、運命つて偶然の寄せ集めだと思うんだ。偶然が重ね合つて今があるなら、それはどうしようも、避けよつの無い流れなんじやないかなと思う。それなら運命も宿命も、変えられないって意味ではじひりも回じなんじやないかな」

「……」

「ちがうっ。」

隆祐が初めて侑子を振り返る。窺うよつて田線を送った。

そして侑子は、限界だった。

「ばっかじやないの」

「……」

隆祐は何も言わず、表情も変えない。侑子の言葉を待つ。

「運命も宿命もね、何もしない奴が、しなかつた奴が使う言い訳なのよ。自分で、自分の人生を変えようって本気で思つてたら変えられないことなんかないんだから」

「……うん」

隆祐は笑つた。嬉しそうに。

侑子はまだまだ言つてやりたいことが有つたが、その笑顔を見ると毒氣を抜かれた様に言葉が出て来なくなつた。

隆祐はカバンを掴んで立ち上がる。

「佐久間さんなら、そつ言つてくれる気がしてたんだ」

ありがとう、と言つて隆祐は教室を出て行く。
残された侑子は、開いた口が塞がらない。

「……なにソレ」

独り言が教室に響く。

もしかして、否定して欲しくて、わざわざ教室に残つてたの
？ 私が田直の田に、皆が帰るのを待つて？

なんだかおかしくなつてきて、くすりと笑う。

侑子にはボンヤリした性格の友人が一人いる。

なんだかその少女と隆祐が似て『いる』ようで憎めなかつた。

「……変なヤツ」

しかも困つたことに、今後隆祐との会話が増えるであろうと予感
する侑子だった。

無題2 no title

「あのや、ウチに来れない？」

「……は？」

あまりに唐突な質問に、侑子は思わず聞き返した。

田の前の少年・隆祐と少しづつ会話をするようになつて、だいぶその突拍子の無い会話にも慣れてはいたが、この質問はあまりにも唐突だった。

今、侑子たちは授業の時間を使って、校外のゴミ拾いに出ている。

エンジ色のジャージで、まだ強い日差しから肌を守り、ぶつぶつと文句を言いながら煙草の吸い殻を取っていた時にそう言われた。

侑子と一緒に掃除をしていた友人もパチクリと目を丸めている。

「ちょっとウチに来て欲しいんだ」

「……」

淡淡と言う隆祐に、特別な感情がある様には見えない。本当に、ただちょっと、家に来て欲しいのだろう。

「……駄目なら……いいんだ。うん。言ってみただけだから」

侑子が無言のまま固まつて居るのを見て、隆祐は頭を搔きながら

離れて行く。

その背中にはなぜか哀愁が漂つているよう見えて、

「……家、ドコなの？」

気がつけばそう言つていた。

少女の性分から言つて、見捨てることはできなかつた。

「よかつた。ダメもとだつたんだけど、言つてみて」

鼻唄でも歌いかねないくらいその声は踊つていて、少年の機嫌の良さが窺える。

普段無表情な彼からすれば、格段に珍しいことだつた。

なにがそんなに嬉しいんだ。

隆祐の後を追いながら、侑子は首を捻る。

電車で一駅。さうに次の駅で降りる侑子は、意外と隆祐の家が近かつたのだと知る。

夕日に染まる川の上を歩いていると、隆祐が振り返つた。

「きつと驚くなあ

「……？」

その言葉は自分に言われた様には思えない。ただの独り言の様だ。

「驚くつて。誰が？」

問われた隆祐は目を細め、少し笑つてまた歩き出す。

答えろよ！

心中で怒つてみても、実は腹が立つてゐる訳でもなく、大人しく隆祐の後を追う。

もういつこうう遣り取りには慣れつ子だつた。

ま、行けば解るでしょ。

行けば解るとは思つてゐたが、まさか口口まで解りやすい驚き方をされるとは侑子も思つていなかつた。

侑子の目の前に立つてゐる女性は、恐らく隆祐の母親なのだろう。うつすら見える白髪とは対照的に、顔付きは少女らしく、どこか可愛らしい顔をしていた。

隆祐は母親似か。

母親と、彼女が驚いた拍子に落としたお玉を交互に見ながら、そんな事を考えた。

「ただいま」

隆祐がお玉を拾い、母親に声をかける。

「…………あ、まわ、まわ、まわー。」

母親はお玉と隆祐を無視するカタチで、侑子に歩み寄った。玄関に、靴下で。

「隆、隆。この子ね？ 前に言つてた子ね？ ホントに、ホントに……」

「…………？」

母親は涙ぐんでいる様に見えた。

「母さん」

「あ、…………」めんなさい。隆祐の母、可南子です。

「…………あ、佐久間悠子です。はじめまして」

一拍遅れて返事、頭を下げた。

「侑子ちゃん」

母・可南子は輝かんばかりの笑みで侑子の手を取り、引っ張る。

「何も無い所ですけど、上がって、ね？」飯食べて行ってね

「あ、あの……」

有無を言わせぬ行動力に困惑しつつも、侑子は居間へと招かれる。横目に見えた隆祐の顔は、ホッとしたような、楽しそうな、優しい顔をしていた。

「帰りはまちやんと送つてあげるのよ、隆」

「うん」

テーブルいっぱいに並べられた和食を突つきながら隆祐が頷く。

「いえ、一人で帰れますから……。道も覚えてますし」

これ以上この母子のペースに乗つてはいけない。そつそつて断ると、可南子は皿を細めた。

あ、また。

時折、可南子は侑子を優しい目で眺める。

食事は美味しいかとか、お茶はどうかとか、そんな世話を焼く時は必ずこの表情になる。

まるで家族に対する表情だと、侑子は思つ。

「女の子一人で夜道は危ないわ。ね、送らせて？ 大丈夫！ この子は襲つたりしないから」

「へ？ ……あ、それは解つてますが」

隆祐は無関心に食事を続けている。

「本当に、侑子ちゃんに何かあつたらオバさん困るし泣いちゃうわ。だから、ね？」

最後の「ね？」には断り切れない力が込もつていた。

「……じゃあ」

しぶしぶ頷く。

無題2 no title (後編)

夜道を一人で歩く。

夏も終わりに差し掛かると、夜風は心地よく体をすり抜けていく。

「ありがとね」

隆祐がぽつりと言つた。

「？」

「あんなに嬉しそうな母さん、久しぶりだった。佐久間さんのおかげだ」

「……」

しばらくの沈黙。

「ねえ」

隆祐が振り返る。

「私、誰かに似てるの？」

可南子の表情を思い出すと、聞いてはならない事のよつて感じたが、

「うん」

隆祐は嬉しそうに笑つた。

「兄さんに、ね」

「……へ、え……？」

「これは、失礼な話と言つものじゃないだらうか。

混乱する頭で考える。

兄？ 私ってそんな男っぽい？ しかもオバさんも一目見て
私と、その兄つてのをタブらせたみたいだし……？

「いJの人」

突然目の前に生徒手帳が広げられた。

中に知らない男が笑つている写真が挟まつていて。

「……あんた、ブラコン？」

思わず聞いてしまう。

隆祐は戸惑い、照れたように笑つて、

「……かな？」

頭を搔いた。

「……ああ、そう」

もう何も言ひ氣にならない。

「憧れてたんだ。生き方とか、考え方とか。俺には無いものをいっぱい持つてた」

悠子は先程の写真を思い出す。日に焼けた肌、鍛えた体でにかりと笑う姿と、自分の何が似ているのか解らない。

「……もう、五年会つてない」

隆祐の言葉にきくりと身を固める。

隆祐があまりにも明るく話すので、勘違いだつたかと思つていたのだが、やはり侑子の考えは当たつていた。

隆祐の表情は暗く、淋しそうに笑つてゐる。街灯が乏しい夜の道では、さらに暗く感じた。

「中東で戦争があつたよね。……それから、しばらくしてかな。自分の目で見て来るつて、家を飛び出して」

「……」

「それから音信普通。生きてるのか……死んでるのかも分からぬ」

「風が吹く。先ほどと変わらぬ風のはずなのに、今はやけに冷たく

感じる。

「俺も母さんも占いが好きで、そんな俺たちを見て兄さんは良く言ったんだ」

「ばっかじゃねーの、って。

悠子はびくっと反応する。

「自分が歩いてるより前に、道は無いんだって、自分が歩いた場所……過ごした時間が人生で、占いなんか意味無いんだって」

「……それ

隆祐がにっこり笑う。

「いつか、佐久間さんが俺に言った言葉に似てるでしょ

「……うん」

「うか。

悠子は納得する。

「そりゃ、中東に飛び立つたりするくらいだもんね。

そういうタイプの人だつたんだ。お兄さん。

「俺も母さんも、日本人や、他の国の人人が人質になる度に、兄さんもどこかで殺されてるんじゃないから怖くて不安で……兄さんが

父親代わりみたいなモノだつたし

侑子は隆祐が母子家庭だつたと悟る。

「たまらなく不安だから、兄さんの前向きな言葉を聞きたくて、でも兄さんは居ないから。だからあの時、思い切つて声をかけた。
…佐久間さんなら言つてくれそつな気がして」

「ばっかじやないのつて？」

「うん。前向きな、何かを……」

「……なんで」

「そつ思つたかつて？」

侑子は頷く。

隆祐は考えるように遠くを見つめた。

「最初に見た時から、なんだか雰囲気が兄さんと似てるなつて思つたんだ。強い意志を持つて、自分を信じてるつていうか……それに」

「それに？」

隆祐が侑子に向く。

「陸上部の奴らに誘われて困つてた時、言つてくれたよね、覚えてない？」

「……ああ

走る意味を見い出せないと言つた隆祐と、それに怒つた陸上部員の遣り取りを、たまたま廊下で耳にした侑子は思わず言つてしまつていたのだ。

走る意味が分からないつて言つんだから、走る必要ないし、誘わなくていいじゃない。それが「イツの意見で、意思で、アンタ達がとやかく言つてじや無いでしょー

「言つた。確かに。……あがお兄さんに似てた?」

隆祐が頷く。

「五年も経つて、兄さんの生存を絶望視してきて、どうしても救われる言葉が欲しかったんだ。佐久間さんなら、兄さんみたいなこと……また言つてくれるかなって

「それで、ウンマーとかシユクマーとか。……私つてそういうの嫌いに見えた?」

「うん

「……

侑子は息を吐く。

「……じゃあ、これも言つてあげる

隆祐は視線をはずすことなく、言葉を待つ。

「いーー。まだお兄さんの遺体を見た訳でも無いのに、絶望視なんてするのがそもそも間違ってるのよ。家族なんだから、信じて待つてなくてどうするの？」

「うん」

隆祐は嬉しそうに笑う。

「お兄さんは、生きてるから。絶対

「うん」

「お兄さんが私に似てるんなら、絶対ぜつたい、しぶとく生きてるから」

「うん」

薄暗い道の上でも、隆祐の顔が濡れているよつて見えたが、侑子はそれ以上何も言わなかつた。

隆祐は駅についても別れることなく、侑子の家が見える所まで送つて来ていた。

「何もココまで来なくていいの?」……

侑子はぶつぶつと文句をたれる。

「佐久間さんに何かあつたら、俺が母さんに殺されるから」

「ほんやりしながらもハッキリした口調で、隆祐はここまで乗り切った。やはり可南子と母子なんだと侑子はしみじみ思つ。

「俺が、兄さんと同じこと言うクラスメイトが居るつて言つた時、久しぶりに母さんが嬉しそうに笑つたんだ。だから家に来て欲しくて……。無理言つて」「めん、今日はホントにありがとつ」

珍しく、明るい優しい笑顔を真正面から受けて、侑子は少し顔をそらす。

「……別に。いいけど。」「飯美味しかつたし」

「ホントに……」

さらに輝いた隆祐の笑顔が近づく。

「じゃ、また来てくれる?」

「……え

「絶対、母さん喜ぶから」

「……ああ、うん

反射的に頷いてしまつていた。

「やつた。じゃあ、また！」

隆祐はいっしょに土産話ができたと思ったのだろう、軽い足取りで去つて行く。

「…………ああー…………なんだか、しまつた…………」

侑子は、隆祐どこのかその母親までも、長こ付を合つてなる気がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4301d/>

無題 no title

2010年12月4日14時54分発行